

「檸檬」の受容論

教科書掲載を視座として

西尾 泰貴

本稿は梶井基次郎の「檸檬」受容に関する研究の一環である。これまでに拙稿^{〔1〕}において、「檸檬」の研究の隆盛と刊行形態、タイトルの変化から「檸檬」の受容について論じた。本稿では、研究の隆盛やタイトルの変化とパラレルに行われていた、「檸檬」の国語教科書採録を視座とすることで、「檸檬」の受容論に新たな視点を提示していく。

二〇一六年現在、教科書に採録されている梶井基次郎作品は「檸檬」のみであり、教育出版、筑摩書房を除いた東京書籍、三省堂、大修館書店、数研出版、明治書院、第一学習社、桐原書店の「現代文B」の教科書に採録されている。しかし、当初より「檸檬」という作品のみが採録されていたわけではなく、「城のある町にて」や「闇の絵巻」といった作品も採録されていた。

なぜ「檸檬」が国語教科書に採録され、梶井基次郎の作品の中で唯一現在も採録されているのか。本稿では、「檸檬」の国語教科書における読まれ方の変遷を中心に、学習指導要領や「檸檬」研究から明らかにしていく。

まず、一章では一九五二年、初めて「檸檬」が採録された

際の設問と学習指導要領から、当時の「檸檬」がどのような目的を担っていたかを考察する。続いて二章では一九六五年以降「檸檬」が増加していった理由を明らかにしつつ、設問が作品の読解を中心としたものになった変遷を追う。そのうえで三章では、一九七〇年代以降、「檸檬」の設問が「私」にフォーカスしたものになった理由を、当時の国語教育で重視されていた「人間形成」という目的に依るものであることを論じ、四章では、今後の課題を述べる。

一、最初の「檸檬」教科書採録

「檸檬」が初めて国語教科書に採録されたのは一九五二年、三省堂の『新国語（改訂版）文学三』においてである。「II 小説の特質」において志賀直哉の「城の崎にて」とモーパッサンの「首飾り」（青柳瑞穂訳）の間に置かれた。「II 小説の特質」の「単元の要旨」では「はたして、文学とはどういうものでしょうか。もう一度これらのことを考えながら、小説を勉強してみましよう。」や「文学のあらゆる様式にわたって、その本質を考えてみましよう。あらゆる方面から検

討してみてもよい時期が来ています」といった、「文学史を学ぶ」目標が述べられている⁽²⁾。

そのためか、この教科書における「檸檬」の設問は「梶井基次郎について調べ、さらに大正末期から昭和初期頃の日本の文壇（特に小説）のことを調べてみよう」や「このような小説を私小説というが、その理由および特色を考えてみよう」、「私小説⁽³⁾などを中心にして、日本の近代小説の特色を研究してみよう」といった作家や文学史的な問いが二問、「主人公（この場合、だいたい作者の分身）はどのような気持ちでいるのか。また、それが、どのように表現されているか、考えてみよう⁽⁴⁾」といった作品内容に関する、いわゆる読解的な問題と同数設定されていた。

このような問題設定は、佐藤泉が「文学を学ぶことの歴史・社会的な意義がきわめて情熱的な調子で語られていた⁽⁵⁾」と述べているように「檸檬」に限ったことではなかった。一九五八年に三省堂の『新国語 総合三』において梶井基次郎の「寛の話」が採録された際も「昭和期文学の概略をつかみ、現代小説を読むための基礎を作りましょう⁽⁶⁾。」という単元の要旨が掲げられ「これはわが国独特のいわゆる心境小説の典型である。その特色をあげてみよう⁽⁷⁾」や「寛の話」の前に置かれていた志賀直哉の「赤西蠣太」を意識して「志賀直哉の場合と比べて、作者の精神状態、対象への対し方の違いについて考えよう⁽⁸⁾」といった問いを付している。

「寛の話」の後に置かれた中島敦の「わが西遊記」においても「三つの作品全体を通して、それらの作者の精神態度の異同について考えよう」「次の参考文献⁽⁹⁾を参照して、これらの作家がどのような傾向にあるか考えてみよう⁽¹⁰⁾」といった問いが付されている。同単元に採録されていた作品、作家を連関させて学ばせつつ、文学史を広く学ぶための問いが設定されていたのである。

こういった問いの設定には「一九五一年改訂版中学校高等学校学習指導要領 国語科編（試案）」が影響していると考えてよいだろう。この指導要領では「読書領域をいよいよ広く深くして、正しい読書習慣を確立させるまでに至らなければならぬ⁽¹¹⁾」というように、高校生の読書領域拡充を目標の一つとして掲げている。文学史を広く学ぶための設問は、小説教材の一つの目標として据えられていた読書領域の拡充を達成するための設問でもあったことが分かるだろう。

一九五一年の学習指導要領に則ったこの時代の国語教科書における小説教材は、作品の読解と並行する形で読書領域の拡充という役割を担っており、あくまで「檸檬」もその一つであった。つまり、「檸檬」の読解自体にさほど重心が置かれていたわけではなかった、ということである。事実、「檸檬」の二回目の採録は一九五一年から一〇年以上経った一九六五年であり、三省堂に限って言うならば二〇〇〇年に至るまで採録されることはなかった。

二、全集刊行後の「檸檬」教科書採録

一九五二年以来の「檸檬」採録となったのは一九六五年の秀英出版『国語 現代編三』と大日本図書『高等学校現代国語三』においてであった。学習指導要領の変更に伴い、秀英出版には「その中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。」（一五七ページ8行）とあるが、このときの主人公の気持ちを想像してみよう。「何か私が私を追いたてる。」（一五八ページ14行）とあるが、何が主人公を追いたてているのか考えてみよう。「第一に安静。がらんとした旅館の一室。」（一五七ページ4行）のように、体言で文が終止している例を抜き出し、そのはたらきを考えてみよう」といった作品の読解を基本とした設問が並んでいる。

一方、大日本図書では「印象のあざやかに感じられたところを取り出してみよう」といった設問以外に「藤村の『嵐』（論者注：教科書内で島崎藤村の『嵐』が「檸檬」の前に置かれていた）には、なにか文体の上で特色といえるようなものがあるだろうか。いままでに各自が読んだいろいろな小説と比べ合わせて考えてみよう。また梶井の『檸檬』の場合はどうか」といった一九五〇年代に見られたような他の小説と比較して読むことを主旨とした設問も付されている。少なくとも一九六〇年代半ばまではこうした学習指導が多少なりとも継続されていたと考えられるだろう。

一九六五年に二つの教科書に「檸檬」が採録された理由だが、大日本図書の教授用指導書には採録理由として「青年期の苦悩の実体やその苦悩の後に展開する将来性などについて深く思索するように配慮した」とある。このような採録理由の背景は一九六〇年の学習指導要領に考慮すべき点として「教材は、明治以降のものとし、生徒の理解や興味、関心や現在および将来においての必要などを考慮して、適切で価値のあるものを広く選ぶ」という文言が追加されたことが関連している。つまり、「檸檬」は青年期である学習者の現在の苦悩や将来を考えるために必要であると考えられたのだ。

加えて、読書領域の拡充を目標としていた一九五一年の学習指導要領とは異なり、一九六〇年の学習指導要領には「作者ならびに作品の背景などの扱いは、作品の読解を基本にして、それに参考になるようにする」という文言が考慮すべき点として追加された。これにより広く文学を学ぶための門戸としての役割を担っていた小説教材は、あくまで「作品の読解を基本」とする学習へとシフトしていくこととなる。また、「現在および将来においての必要などを考慮」した結果、一九五〇年代に見られたような文学史を学ぶための設問も消えていった。一九六〇年代の教科書は文学史といった過去ではなく、現在や将来へと焦点化していったのだ。

しかし、「檸檬」採録により多くの影響を与えたのは、前述したような学習指導要領の改訂によるものではなく、一九

五九年以降の「檸檬」研究であろう。「檸檬」研究において長らく主流となっていた読み方は、一九三二年の小林秀雄の「昨年梶井氏の創作集『檸檬』が上梓された時著者から贈られてこれを通読し、清澄鋭敏にみる作家資質と私は感服した⁽¹⁶⁾」という評から始まった、作品を作家へと還元していく読み方であった。

鈴木貞美は小林秀雄の評を「長い間、梶井基次郎に対する評価の内容と方向を左右してきたもの⁽¹⁷⁾」と述べており、このような読み方を「資質還元主義」と呼んだ。このような「資質還元主義」的な読み方は、磯貝英夫が「梶井が例外的に自己の資質のほぼ完璧な文学的定着に成功した⁽¹⁸⁾」と述べ、高田瑞穂も「磯貝君のいわゆる『閉鎖的資質論』を正しく越えることは不可能であるにちがいない。むしろ私はこう言うべきであろう。『閉鎖的資質論』を越えるために先づ必要なものは、かえって正確な資質論である⁽¹⁹⁾」と述べるように、再生産されていた。

このような「資質還元主義」的な読み方と並行する形で現れたのが、習作との比較研究である。一九五九年の筑摩書房版『梶井基次郎全集』において「秘やかな楽しみ」「瀬山の話」といった「檸檬」の習作群が載録されたことを皮切りに、福永武彦や三好行雄が、いち早くこうした手法を取り入れた研究を行った。

習作との比較研究はその後増加していった。そして、鷺只

雄が「論の積み重ねがないことは呆れるばかりである。むしろかえしと放置がそれであるが、殊に同人誌や各大学の国文学会誌所載の卒業論文に手を入れたものにこれが甚しい。梶井と例えば『檸檬』⁽²⁰⁾、『檸檬』と例えば草稿の検討からというパターンなのである⁽²¹⁾」とまで言うように、主流の読み方となっていたと考えられる。

こうした研究の隆盛が背景にあったが故に、国語教科書に「檸檬」が採録されるようになっていったのである。

三、「人間形成」という役割

研究上では「作家の資質」として読まれることが多かった「檸檬」だが、一九七〇年代を境に国語教科書では、ある明確な目的を持った読まれ方が付与されていくこととなる。一九七二年の大日本図書 of 教科書では次のような設問が付された。少し長いが、設問をそのままを引用する。

〔研究〕

1 「私」は「えたいの知れない不吉な塊」(P 74・2)とどのようにして戦おうとしているのか。

2 「みすばらしくて美しいもの」(P 74・9)として、どのようなものが挙げられているか。

3 「画本」の「城壁の頂におそるおそる檸檬をすえつけ」(P 81・3)ることによって、「憂鬱」から抜け出すこ

とができたのは、どのような心の働きによるものか、あとづけてみよう。⁽²³⁾

また、一九七三年の教育出版の教科書では次のようになっている。

【演習】

一 「私」は「えたいの知れない不吉な塊」と、どのように向かい合い、戦っているのか考えよう。

二 「みすばらしくて美しいもの」は、「私」にとってどういう意味を持っているか説明しよう。

三 「M店」は「私」にとって、どういうものであるか、「私」の過去・現在にわたって考えよう。

四 「私」は「憂鬱」から、何によって、どのように解放されたか。また、それまでの「私」の心理や行動であとづけよう。

五 表現に即して、「闇と光」のイメージをとらえよう。⁽²⁴⁾

ここで注視すべきは「私」に関する設問の多さである。一九五〇年代、六〇年代の教科書には見られなかったものであるが、七〇年代の教科書では「私」に関する設問が一举に出現する。斎藤義光によると一九七〇年代「社会的情勢の急激な変化が、国語教育の上にも、人間形成の点で、また社会の

情報化の点で、影響を与えはじめ」、一九七二年当時の「国語教育の傾向と性格を、その頃の各研究団体の大会のテーマならびに副題で概略」すると「豊かな心を育てる国語教育」（国語教育科学研究会）、「教科における能力開発と人間形成」（全国構造教育研究会）、「国語教育における人間形成と言語能力」（全日本国語教育研究協議会）、「人間関係・人間性の開発と話しことば教育」（話しことばの会）など」の「人間性にかかわるテーマ」⁽²⁵⁾がフォーカスされたと述べている。一九七〇年代の国語教育においていわゆる「理想の人間形成」といった目標が強調され始めたのだ。

ここに「私」に関する設問が付された理由を見出すことが出来るだろう。つまり、読書領域の拡充から作品の読解を基本とするようになった国語科に、七〇年代新たに「理想の人間形成」という役割が担わされるようになり、「私」を中心として「檸檬」を読むことで作品内の「私」と学習者自身の「私」を相対化し、学習者の人間形成や人間理解が促進していくことを期待したのである。

このような「私」に関する設問は八〇年代、九〇年代においても引き継がれていった。なお、以降八〇年代以降の教科書の設問を見ていくが、「檸檬」を採録する教科書も増加し、全ての教科書を見ていくことはできないため、ここでは比較的高かった教科書会社を取り上げていく。⁽²⁶⁾

一九八一年の明治書院の教科書では、「えたいの知れな

「不吉な塊」(二六ページ1行)のために、「わたし」(論者注…本教科書では「わたし」表記であった)はどんな状況にあったかまとめてみよう」「二、「わたし」はなぜ「見すばらしくて美しいもの」(二六ページ9行)にひきつけられているのか考えてみよう」といった「私」に関する問いが、七〇年代の教科書以上に増えており、六つの設問全てが「私」に関する問いになっている。加えて明治書院においては、「檸檬」本文の「私」という表記を、わざわざ「わたし」という平仮名表記に変えている。また、一九八七年の東京書籍、一九八八年の第一学習社の設問も全て「私」に関するものである。

八〇年代のこれらの教科書に共通している点は「私」に関する設問の多さだけではない。明治書院が「檸檬」を採録した理由は「何か鬱屈した、深刻な情感を、しっかりとした自己凝視・表現の上に構築した作品であり、ややもすれば軽信移動、短絡に陥りがちな青少年に、人間理解、人間形成、人間表現の望ましい姿を植え付けるための糧の一部になし得ることが期待される」⁽²⁸⁾からである。

また、東京書籍の採録理由は「『不吉な塊』が「文学作品の世界においてのみ特有な問題ではなく」、「作家のみに固有の、個別的な問題であるということではない。これらは、我々が日々生活していく上で、必ずといってよいほど逢着する課題であり、こういった作品に接するということは、自己

をみつめ、社会をみつめ、人生を考えていくことであること
を理解させたい」⁽²⁸⁾ためである。

採録理由を見て分かるように、「檸檬」を「人間形成」や「自己をみつめ」る教材として扱うだけでなく、両教科書ともに「檸檬」における「私」の不安や悩み、「不吉な塊」といったものを、青少年、つまり学習者の心情と重ねて読んでいるのだ。一九九九年に東京書籍が再び「檸檬」を採録した際、「『えたいの知れない不吉な塊』に心を脅かされるということは、青年期にあつてだれもが一度は経験することであり、いわば普遍的な心情作用であるといつてもよいのではないか」⁽²⁹⁾と述べていることから、八〇年代、九〇年代を通じてこのような「私」の心情と青少年の心情を重ねる読み方が教科書上で継続されていったのだ。

加えて七〇年代の教科書の設問では「私」は憂鬱から抜け出せた、あるいは解放されたという読み方を前提としているが、八〇年代の教科書ではそのような読み方は前景化してこない。憂鬱から抜け出していく成長に焦点をあてるというよりも、憂鬱を抜け出せたかどうかは分からない青年として「私」を扱っている。つまり、「私」の読み方自体がより内面へと向いている、憂鬱を抱えたままの青年へと変化しているのだ。七〇年代、八〇年代ともに「私」を設問の中心として据える方向性は変わっていないが、その「私」は異なる「私」として読まれていたのである。

「檸檬」における憂鬱を抱えたままの青年、内面へ向いている青年という「私」像は研究史の中でも現れている。一九九九年、鷺只雄は「檸檬」が何故多くの若者たちの支持を得、青春の文学として評価されるか」と言う憂鬱から脱出したいという「現実脱出の希求」が「青春の未熟さ」といった青年の本質や、青年の唐突かつ空想的な地に足がついていない行動から拡大される「不安」と「時代の不安」が理由であり、「これに、後代の青年たちは、それぞれの時代の不安を重ね合わせて「檸檬」におのれの「生の不安」「青年の不安」を読んでいるといつてよいのではないか」と結んでいる。

憂鬱な青年、不安を抱えた青年という「私」像は、「檸檬」研究から始まり、「檸檬」研究を参考に行っている国語教科書から、さらに「檸檬」研究へと再び繋がっていき、相互に紡がれていったものでもあったのである。

「檸檬」という作品は、なぜ国語教科書に採録され、定番化していったのか。一九五二年の初めての採録では他の文学教材と同様、読書領域の拡充のため、あるいは文学へ広く開いていくための門戸としての役割を担っていた。ただし採録は続くことなく、一九六五年に研究の隆盛が影響した結果、再び採録されるようになった。そして研究史を反映した読み方とともに七〇年代に「人間形成」といった役割を担うようになり、八〇年代以降「私」の読み方を変えながら、「人間形成」のための読解が再生産されていった結果、「檸檬」は

定番教材として採録されるようになっていったのだ。

さらに、前述してきた作品の読まれ方の変化以外に、一九九九年に「闇の絵巻」を採録していた角川書店が二〇〇三年に教科書から撤退したことや、一九九九年に同じく「闇の絵巻」を採録していた右文書院と「城のある町にて」を採録していた旺文社が二〇一三年に撤退していったことも「檸檬」の教科書における主流化に拍車をかけていくこととなった。³⁾教科書会社の寡占化も、「檸檬」が教科書において主流となった理由の一つとなっているのである。

四、今後の課題

定番教材となった「檸檬」だが、二〇〇〇年になるとこれまでと異なった読み方を提示する教科書もあらわれてくる。実に四八年ぶりに三省堂が採録した際の設問は以下の通りである。

【課題】

一 「そのころ」の「私」はどのような状態であったか、またどのようなものに心ひかれていたのか、整理してみよう。

二 「それにしても心というやつは何という不可思議なやつだろう。」(137/2)という一文が作品全体の中でもつ意味について考えてみよう。

三 「そのころ私は…覚えていた。」(132/9)、「それがあのころのことなんだから。」(137/13)という回想の形式がもたらす効果について考えてみよう。

四 この作品に特徴的な、視覚・触覚・嗅覚・味覚・聴覚などの感覚的表現について整理し、その効果について考えてみよう。

五 「檸檬」はどのようなイメージをもつものとして描かれているか、作品全体の中で果たしている役割に留意して考えてみよう。⁽³³⁾

「私」に関する問いは少なく、文章や表現のもつ効果といった、あくまでテクストの読解を中心とした問いが設定されている。指導資料には、『檸檬』は私小説として評価が高まり、作家の伝記的事実や、病とのかかわりを重視した読みによって「授業がなされることが多かったが、「肺結核という病を患う私を描いた「私小説」ではなく、「一顆のレモンに結実する詩的な美を形象化しようとする文学的虚構として」「新たな視点の読みをみいだしたいという思いから」採録した、とある。

「檸檬」の「文学的価値の重さを、時代や伝記的事実に解消するのではなく、現在形での文学的営為として、その孤独な言葉による闘いの意味を読み取って」⁽³⁴⁾いくと述べているように、明らかに「資質還元主義」的な読解、あるいは「私」

に依った読み方へのアンチテーゼとして、前述のような問いを設定しながら、あえて三省堂は「檸檬」を採録したことが分かる。

以上、本稿では教科書における「檸檬」の読まれ方が、研究や学習指導要領、国語教育の目的から影響を受け、変化していった過程を明らかにした。以前、拙稿では「檸檬」が梶井基次郎の他作品と比べ、研究上において多く受容されていた変遷と、一九三一年以降、「梶井基次郎作品集」として刊行されていた書籍のタイトルが、一九六七年の新潮社による『梶井基次郎全集』から『檸檬』への改題を皮切りに変化していき、評価が高まっていく過程を追った。そしてその際、研究上の受容、一般書籍における受容、そして教科書上での受容がパラレルに行われていったことを述べた。

本稿で扱った「檸檬」における「私」像の変遷では、それまでの研究史上における読まれ方を引き継いだ「私」梶井基次郎」という資質還元主義的な「私」像に加え、教科書では一九七〇年代に人間形成としての「私」像が付与されていったことが分かる。さらに、一九八〇年代では「憂鬱から抜け出すことができた私」像から「憂鬱から抜け出せなかったかとは分らない私」像へと変化していき、先に述べた鷺只雄のように、教科書における「檸檬」と「檸檬」研究は相互的に影響を与えていき、「檸檬」の青年に共感されやすい、憂鬱を抱えた「私」像が形成されていった。つまり、「檸檬」の「私」像は、

研究と教科書の相互的な影響によって、紡がれていったのである。

今回は「教科書」を中心として「檸檬」の受容を述べたが、「教科書」における読まれ方の大まかな流れを把握するに留まってしまった。今後は、三つのパラレルな流れの細かい連関を考察し、どのように「檸檬」の読まれ方が変遷し、どのように受容されていたかをより明確にしていけることを課題としたい。

注

- (1) 「梶井基次郎作品の受容について——『檸檬』刊行形態と評価の変遷——」(『リテラシー史研究 第九号』二〇一六年)
- (2) 『新国語 (改訂版) 文学三』(一九五二年、三省堂)
- (3) 同注 (1)
- (4) 同注 (1)
- (5) 佐藤泉『国語教科書の戦後史』(二〇〇六年、勁草書房)
- (6) 『新国語 総合三』(一九五八年、三省堂)
- (7) 同注 (5)
- (8) 同注 (5)
- (9) 平野謙「昭和文学の特徴」、『現代日本文学入門』(要書房、一九五三年) から採録された。
- (10) 同注 (5)
- (11) 国立教育政策研究所「昭和二六年度 学習指導要領 一般編 (試案) 国語科」(『学習指導要領データベース』<https://www.nier.go.jp/guideline/s26ej/chap2-4.htm> 二〇一六年 一一)

月一日参照

- (12) 『国語 現代編三』(一九六五年、秀英出版)
- (13) 『高等学校現代国語三』(一九六五年、大日本図書)
- (14) 国立教育政策研究所「昭和三五年年度 高等学校学習指導要領 国語」(『学習指導要領データベース』<https://www.nier.go.jp/guideline/s35h/chap2-1.htm> 二〇一六年 一二月一日参照)
- (15) 同注 (14)
- (16) 小林秀雄「文芸時評——梶井基次郎と嘉村礒多」(『中央公論』、一九三二年、中央公論社)
- (17) 鈴木貞美「解説」(『梶井基次郎『檸檬』作品論集 近代文学作品論集成⑫』二〇〇二年、クレス出版)
- (18) 磯貝英夫「梶井基次郎・檸檬」(『現代日本文学講座 小説 6』一九六二年、三省堂)
- (19) 高田瑞穂「資質論をどう超えるか——梶井基次郎私見」(『本』一九六四年、麦書房)
- (20) 福永武彦「『檸檬』鑑賞」(『近代文学鑑賞講座18 梶井基次郎』、一九五九年、角川書店)
- (21) 三好行雄「檸檬」(『国文学 解釈と鑑賞』、一九六三年、至文堂)
- (22) 鷺只雄「解説」(『日本文学研究資料叢書 梶井基次郎・中島敦』一九七八年、有精堂)
- (23) 『新訂版 現代国語三』(一九七二年、大日本図書)
- (24) 『現代国語 二』(一九七三年、教育出版)
- (25) 斎藤義光『高校国語教育史』(一九九一年、教育出版センタ

(26) 『教科書レポート⁸²』(出版労連教科書対策委員会編、一九八二年、日本出版労働組合連合会)では占有率の高い順に「明治書院:23・8%、尚学図書:14・4%、東京書籍:9・6%、その他:10社12点52・2%」となっている。

(27) 『現代国語(三)新修二版 指導資料』(一九八一年、明治書院)

(28) 『改訂現代文 指導資料上』(一九八七年、東京書籍)

(29) 『精選現代文 二分冊指導資料』(一九九九年、東京書籍)

(30) 鷺只雄『檸檬』(『国文学 解釈と教材の研究』一九九九年)

(31) 阿武泉「読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品」3800

(二〇〇八年、日外アソシエーツ株式会社)によると一九五二

〜一九六二年には四三社あった教科書会社は、一九八二〜一九九三年には一六社にまで減少したことが分かる。

(32) 『高等学校現代文2』(二〇〇〇年、三省堂)

(33) 『高等学校現代文「2」 指導資料』(二〇〇〇年、三省堂)

(34) 同注(28)

(にしお・たいき／早稲田大学大学院)